

二次元可能世界意味論の展開 (1)

——初期の二次元意味論——*

小草 泰

1. はじめに

クリプキ(Kripke, 1980)やカプラン(Kaplan, 1989)らは、固有名や指標詞、自然種名のような表現は直接指示表現であること、すなわち、それらの表現はどんな可能世界でも(現実世界と)同一の対象を指示することを説得的に主張した。しかしこのテーゼは、説明を要する(と彼ら自身にも思われた)ショッキングな帰結を伴っていた。例えば、「フォスフォラス」と「ヘスペラス」はともにどの世界でも金星を指示する固有名であるから、「フォスフォラス=ヘスペラス」はどんな世界でも真となる必然的な言明であるということになる。しかしそれにもかかわらず、この言明はアポステリオリであり、実質的な認識的価値を持つ。また、「フォスフォラス」という名前を理解している人なら誰でも、それが「明け方に東の空に見える星」という記述を満たす対象を指すことを知っているだろう。すると、「フォスフォラスは明け方に東の空に見える星である」という言明はアプリオリに知られる。にもかかわらず、現実世界において「フォスフォラス」によって指示される対象(=金星)が明け方に東の方向に光って見えないような世界は考えられるので、その言明は偶然的である。これらのアポステリオリな必然性とアプリオリな偶然性は、直接指示説を受け入れた場合に対処すべき問題とみなされた。

例えば、アポステリオリな必然性が問題とみなされたのは、アポステリオリ性と偶然性を結びつけるもっともな理由があると思われたからである。ある言明が真であることがアポステリオリにしか知られないのは、その言明が偽になるような可能性を排除するために、経験的な証拠が必要とされるからであろう。ところが、必然的に真である言明とは、そもそもそれが偽になるような可能性のない言明である。すると、アポステリオリでありかつ必然的に真な言明などありえないように思われてくる。また、アプリオリな偶然性についても同様のことが言えるだろう。

1970年代に現われ、近年チャルマーズらによって展開されている、種々の二次元意味論は、(それぞれかなり異なるやり方で)これらの問題に対処しようとする試みとして理解される。二次元意味論の提唱者たちは、いったん直接指示表現の指示がある

特定の世界で固定された限りは、直接指示説の言う通り、それらの表現の内包はどの世界でも（問題の特定の世界での対象と）同じ対象を外延として選び出すことを認める。しかし、その上で彼らは、表現がそのような（固定指示的な）内包を持つこと自体が、そもそも最初にどのような世界においてそれが発話され、その指示が固定されたかに依存する、と指摘する。そして、表現（文）が表すことになった内包（命題）が各可能世界とつきあわせられ（評価を受け）るという

従来認められてきた次元に加えて、そもそも表現（文）がどの内包（命題）を表現することになるのかが各世界で決定されるという次元をも、重要なものとして取り込もうとするのである。例えば、「フォスフォラス＝ヘスペラス」は、いったん明け方と夕方に見える星

二次元の世界 →

	w	w'
w	T	T
w'	F	F

表1

が同じ金星であるこの世界 w で発話された（あるいは w が現実世界であった）限りは、金星が金星と同一であるという趣旨の命題を表現し、それはどの世界でも真となる。しかし、そもそもこの文が発話されたのが、明け方に見える星は金星だが、夕方に見える星は火星である世界 w' であった（あるいは w' が現実であった）なら、この文は金星が火星と同一であるという趣旨の別の命題を表現し、それはどの世界でも偽となったであろう、とされるのである。この事態は表1によって表されるだろう。

一番左の列は、文が発話され（文に含まれる表現の指示が固定され）る世界がどの世界であるかを表す。ここで問題とされる世界を**一次元の世界**と呼ぼう。そして、一番上の行は、各一次元の世界で言明が表現することになった命題が（真偽の）評価を受ける世界を表す。こちらを**二次元の世界**と呼ぼう。すると上の行列全体は、問題の言明が、 w で発話されたなら、どの世界でも真となる命題を表現し、 w' で発話されたなら、どの世界でも偽となる命題を表現すると述べているのである。このような行列全体によって表される、一次元の世界から命題への関数を、**二次元的内包**（two-dimensional intension）と呼ぼう。また各行が表す、二次元の世界から真理値への関数である通常の命題を、**二次内包**（secondary intension）と呼ぼう。さらに上の行列には、それに加えて、対角線上に現われる真理値によって表されるもう一つの命題が含まれている。この命題は、大雑把に言えば、任意の世界 w において発話された事柄が w において真であるときに、 w において真となるような命題である。この命題を**一次内包**（primary intension）と呼ぶことにしよう⁽¹⁾。

上の言明の現実世界 w における二次内包はどの世界でも真となる必然的命題だが、一次内包は、 w では真、 w' では偽になる偶然的な命題である（そして二次元的内包は、

w' に対して、 w と w' の両方において偽となる命題を与えるものである)。このことに訴えて、アポステリオリな必然性などの問題を処理しようとする点に、二次元意味論の基本的なアイデアがある。大雑把に言えば、ある言明が必然的でありながらアポステリオリでありうるのは、その言明の二次内包は常にどの世界でも真だが、しかしその一次内包はどの世界でも真であるわけではない（あるいは、その言明の二次元的内包はいつも、どの世界でも真となる命題だけを与えるわけではない）からだ、という仕方でパズルに対して解決が与えられるのである。アポステリオリ性と必然性という相容れないように見える特徴は、それぞれ別個の内包に対応するとされるのである。

しかし、この核となる考えをより具体的に展開する際に、それぞれの論者の重要な相違点が明らかとなる。まず、以上の道具立てをどれだけの範囲の表現に適用できるかに関して意見の相違がある。また、一次と二次の内包や一次元と二次元の世界のような抽象的な概念装置を、より具体的にどのようなものとして解釈するかに関しても大きな違いがある。さらには、二次元的枠組みによってクリプキの問題に与えられる解決が、どのような身分を持つものなのか（意味論的な解決なのか、アプリオリ性についての分析を与えるものなのか）といった点も重要な論点となる。

以上のような論点に関する相違に留意しつつ、本論では、まず、歴史を遡って、1970年代から80年代にかけて現れた初期の二次元意味論を概観し、その特徴を明らかにすることを目指す。特に、彼らの試みは二次元意味論の発展の基礎を提供するものであった一方で、ごく限られた表現にしか二次元的枠組みは適用されなかったり、あるいは、一次内包に相当するものは二次内包に相当するものに対して派生的であるとされた点において、彼らの提案は保守的なものであったことを確認する。彼らの二次元意味論は、これらの点において、「全ての表現が一次内包と二次内包を持つ」とする適用範囲の広さや、「アプリオリ性とは一次内包の必然性である」とするスローガンの大胆さにおいて際立っている、チャルマーズらによって近年展開されている**認知的二次元主義**（論文(2)参照）に比べて、つつましいものだったのである。

2. 初期の二次元意味論

2.1 カプラン —— 意味特性と意味内容

カプラン(Kaplan, 1989)は指標詞（指示詞）に関する直接指示説的な意味論を構築したが、その意味論は二次元的な枠組みを含んでおり、後の二次元意味論の発展における一つの重要なモデルを提示するものとなった。カプランは、「私」「今」といった指標詞、また「これ」のような指示詞は、**意味内容** (content) と**意味特性** (character)

という二つの意味論的値を持つと主張する。意味内容とは、二次内包に相当するものであり、ある表現の現実の発話の文脈における指示対象をどの世界でも選び出す内包として理解することができる。それに加えてカプランは、指標詞がどんな意味内容を持つかは、それがどんな発話の文脈（カプランにおける一次元の世界）で発話されるかによって決定されることに着目して、発話の文脈から意味内容への関数として機能する意味特性というもう一つの意味論的値を認める。例えば、発話者Uによって発話された「私」が、どの世界でもUを選び出すような意味内容を持つことは、「問題の発話の発話者」というこの表現の意味特性と、それが発話者Uを含むような文脈で発話されたという事実とによって決定されるのである。文のレベルに関して言うと、例えば「私は日本人だ」という文がUによって発話された場合、まず意味特性が、Uが日本人である世界において真となるような意味内容を決定する。そしてその意味内容が値踏み場（二次元の世界）としての各可能世界と付き合わされることによって（その世界でUが日本人であるかどうかに応じて）真または偽となる。

このような道具立てによって、カプランは、指標詞や指示詞にまつわるクリプキ流の困難に対して一定の答えを与えようとした。例えば、カプランによれば、「私は今ここにいる」という文はアプリアリに真であると知られるが、しかしそれが表す意味内容は「ある人物がある時点にある位置にいる」という偶然的なものである。この一見したところの齟齬は、この文の意味特性が任意の文脈において生み出す意味内容はいつも当の文脈を含む世界において真となるという点に着目することによって解消される、と彼は言う。ある発話の発話者がその発話の時点において発話の生起する場所にいないことはあり得ないので、この文は常に、当の発話がなされた世界に関して真な意味内容だけしか生み出さない。このことが理解されているゆえに、この文を用いてなされる個々の発話の意味内容は当の発話の文脈以外の状況では偽でありうるような偶然的なものであっても、この文はアプリアリなのである。

カプランの指標詞の意味論は、後の二次元意味論の発展において一つの主要なモデルを与えたが、しかし彼自身は、二次元意味論を一般的に展開することに関しては消極的であった。カプランは、意味特性と意味内容という二次元的な装置を、指標詞や指示詞以外の表現に適用しようとしなかったのである。例えば、「私」という語には、日本語の意味論によって「発話者を指す」という言語的意味が明示的に割り当てられているのに対して、固有名などには、意味内容としての指示対象に加えて、それから独立の意味特性が割り当てられているとは彼は考えなかった。それゆえ、固有名に関しては意味特性と意味内容（と指示対象）の区別はなくなり、「キケロ＝タリー」のよ

うなアポステリオリな必然性の事例を、二つの名前の意味特性の違いに訴えて説明することはできないのである。

また、カプランにおいては、一次元の世界が発話の文脈とされていることからわかるように、彼の意味論は、言語表現の文脈依存性を説明することを目指したものである。そして、このような意味論が、アプリアリ性一般についての説明を提供する見込みはなさそうに思われる。具体的に言うと、「ある言明がアプリアリであるとは、その意味特性が、どの文脈においても、その文脈の世界において真となる意味内容を生み出すということだ」というような説明は成り立たないだろう。なぜなら、例えば、「ここで発話が行われている」のような文の意味特性は、文脈依存性によって、常に、当の発話の文脈の世界において真な意味内容を生み出すけれども、その言明がアプリアリであるというのはもっともらしくないからである。カプランの意味論が持つこのような特徴は、一次元の世界を、(発話の文脈に限定されない)「話者(主体)にとって世界がどうありうるか」という認識的可能性とみなし、それに基づいて、アプリアリ性を一次内包の必然性として一般的に説明しようとする後のチャルマーズらの方針とは対照的である。

2.2 スタルネイカー —— 対角線命題

スタルネイカー(Stalnaker, 1978)は、カプランとは異なる仕方で二次元意味論を提示し、クリプキ的問題に対処しようとした。彼は、ある文の発話が、それが現に表現するところの命題を表現するようになるということは偶然的な事実であるという点に着目し、文の発話が持つとされる通常の命題(二次

二次元の世界 →

	w	w'
w	T	T
w'	F	F

表2: 命題概念

内包)に加えて、各可能世界からそれらの命題への関数として機能する**命題概念**(propositional concept)という概念的装置を提示する。この命題概念とはつまり、冒頭で見たような行列によって表されるものに他ならない。例えば、今、明け方に東に見える星と夕方に西に見える星がともに金星である現実世界 w と、明け方に見える星は金星だが、夕方に見える星は火星であるような可能世界 w' だけを考えるとしよう。すると、「ヘスペラス=フォスフォラス」という文の発話の命題概念は表2のように表される。

既に見たように、この命題概念は、行列の左上から右下の対角線上に現われる真理値によって表される一次内包を含んでいる。これをスタルネイカーは**対角線命題**

(diagonal proposition) と呼ぶ。スタルネイカーは、「ヘスペラス=フォスフォラス」が w において表現する命題は必然的に真な命題であるが、対角線命題は偶然的な命題であるという事実に基づいて、必然的な命題を表現するある種の言明が、それにもかかわらずいかにして実質的な情報を与えうのかというクリプキ的な困難に対処しようとしたのである。

その際のスタルネイカーのやり方は、主張という行為に関するプラグマティックな原理に訴えるものだった。彼によれば、主張という行為の本質的な効果は、会話の参加者の間で共通の背景となっていると話者がみなしている一連の命題からなる前提に、新たに主張された事柄を付け加えることによって、その前提を変化させることにある。より具体的に言うと、前提は、前提されている事柄と両立しうる可能世界の集合である**文脈集合** (context set) を決定する。主張は、新たに主張された事柄と両立しない可能世界を排除するという仕方です、この文脈集合をせばめようとする行為なのである。スタルネイカーは、主張がそのようなものとして機能するために守られるべき三つの原理を提示する。それは、[1]文脈集合に含まれるどの世界でも真（あるいはどの世界でも偽）となる命題を主張してはならない、[2]主張的な発話は文脈集合に含まれるどの世界においてもある命題を表現し、そしてそれらの命題はどの世界においても真理値を持つのでなければならない、[3]文脈集合に含まれる各世界に関して同一の命題が表現されなければならない、というものである。

さて、「フォスフォラス=ヘスペラス」の例に戻ると、 w と w' が問題の発話がなされた会話の文脈集合を形成しているとして、上の行列によって表される命題概念は、原理[3]に反しているように見える。この命題概念は、 w と w' のどちらが現実であるかに応じて異なる命題を決定するので、そのままではどのようにして文脈集合をせばめるべきかを明らかにしてくれないのである。さらに、たとえ現実世界を固定したとしても、それぞれの世界で表現される命題は、どんな世界でも真であるかあるいはどんな世界でも偽であるような命題なので、この命題概念は[1]にも反しているように見える。しかしここで、この発話は原理に反する失敗だと結論する前に、実は主張された内容は行で表される二次内包ではないのではないかと考えること、つまり主張を再解釈することが、プラグマティックな観点からして適切である。そして、その際主張された内容の候補となるのが対角線命題なのである。この再解釈を施されることによって、「ヘスペラス=フォスフォラス」の発話は、表3が表す命題概念

二次元の世界 →

	w	w'
w	T	F
w'	T	F

表3:表2の対角化

を持つ、w'を排除しようとする主張として理解されることになる。

必然的な命題を表すはずの言明が情報価値を持つものとして主張されるという事態を以上のように説明することで、スタルネイカーはアポステリオリな必然性というパズルに対して一つの答えを提案した。つまり、それらの言明は、現実世界において必然的な命題を表現するが、しかし偶然的な対角線命題を持つものとして理解されるのである。

スタルネイカーの提案は、カプランの指標詞の意味論と異なり、固有名や自然種名にも適用されうるものだったといった点において、後の二次元主義により接近していると言えよう。しかし他の点では、スタルネイカーも、後の二次元意味論に比べて保守的であった。とりわけ、彼の考えによれば、対角線命題は会話に関するプラグマティックな原理に従って主張の内容とみなされることはあっても、通常の命題（二次内包）がそうであるように、ある言語の意味論によって文に帰属される意味論的値としての身分を持つことはできない、という点が注意されるべきである。というのも、スタルネイカーのねらいは、あくまで通常の命題が文の唯一の意味論的値であることを受け入れたうえで、文がその意味論的値を持っていることが一次元の世界のあり方に依存していることを命題概念（二次元的内包）を用いて示すことにあったからである。つまり、命題概念（や対角線命題）を用いた彼の説明は、「何が表現の意味論的値か」を問う意味論的レベルではなく、「どのような事実のおかげで、表現はそれらが現に持つ意味論的値を持つのか」を問う（後のスタルネイカーの用語によれば）メタ意味論的レベルに属するのである。

しかし、このメタ意味論的理解に基づくと、アプリアリ性を対角線命題の必然性として分析するということは不可能になる。なぜなら、アプリアリな文の典型例とみなされる「 $1+2=3$ 」のような文ですら、「1」が他の数を意味論的値として持つ世界では偽になるからである。スタルネイカーは、後に、自説のこの特徴をはっきり自覚するようになるが、そのことは、後のチャルマーズらの二次元意味論に対する彼の評価において、重要なポイントとなる（論文 (3) 参照）。

2.3 エヴァンズ — 深い必然性と浅い必然性

エヴァンズ(Evans, 1979)は深い必然性（偶然性）と浅い必然性（偶然性）という区別に訴えて、アプリアリな偶然性の事例に一定の解明を与えようとした。そしてその際、言明が二つの意味論的値を持つという二次元的枠組みを提示した。

エヴァンズは、アプリアリな偶然性というパズルを引き起こすものとしてクリプキ

以来取り上げられてきたのは、記述名という非常に特殊な表現を含む言明であったと主張する。記述名とは、記述によって指示が固定される名前である。記述名は、どの世界でも現実と同一の対象を指すという点で通常の固有名と似ているが、他方で、記述名を含む文を理解するのに必要なのは、記述が表す事柄を理解することだけであるという点では、確定記述に似ている。エヴァンズによって有名となった記述名の例は、誰であれジッパーを発明した人を指す名前として導入される「ユリウス」である。この記述名を含む言明

誰かジッパーを発明した人が一人いるとするならば、ユリウスがジッパーを発明した

は、現実世界でジッパーを発明した人（つまりユリウス）以外の誰かがジッパーを発明した世界では偽となる偶然的な言明である。にもかかわらず、「ユリウス」という語を理解している人なら、この言明が真であることをアプリアリに知ることができる。

この事態に対するエヴァンズの診断は、**浅い必然性** (superficial necessity) と**深い必然性** (deep necessity) という区別に訴えるものだった。つまり、上の言明は、浅く偶然的ではあるが、深く偶然的ではない（深く必然的である）。そして、そのような言明がアプリアリに知られることには何ら問題がない、というのである。

エヴァンズは、ある言明が浅い偶然性と必然性、そして深い偶然性と必然性という二種類の特徴を持つことを、言明が二つの種類の意味論的値を持つことによって説明する。ある言明 S が浅く偶然的であるということは、 S が偽であるような可能世界が存在するということである。つまり浅い偶然性は通常的可能世界意味論における偶然性である。そして S がこの意味で偶然的であるかどうかは、 S が持つ意味論的値の一つである、可能世界から真理値への関数とみなされる**命題**が、全ての世界に関して真理値真を与えるものかどうかに対応する。命題は、二次内包に相当するものとして理解されよう。上の言明が表す命題は、ある世界に関しては真理値偽を与えるものなので、この言明は浅く偶然的である。

命題は単なる関数であって、言明が理解されるときに理解される事柄とは直接関係しない（例えば、どんな必然的言明も、全ての世界に関して真を与える同一の命題を持つ）。これに対して、深い偶然性は、言明が理解されるときに理解されているところの**内容**（一次内包に相当する）というもう一つの意味論的内容と対応する。エヴァンズによれば、話者がある言明を理解するとき理解している内容とは、「何がその言明

を真とするのか」ということである。そして、言明を真とするその何かが常に成り立っていることが保証されているようなものであるかどうかによって、問題の言明が深く必然的であるかどうかが決まるのである。上の言明を真とする事柄は、「ユリウス」という語に関する意味論的な取り決めによって、常に成立することが保証されているものなので、この言明は深く必然的である。

ここにおいて、上の言明が持つ「偶然的である」という特徴と「アプリアリに知られうる」という特徴はそれぞれ、「命題の偶然性＝浅い偶然性」と「内容の必然性＝深い必然性」という別の要素によって説明されるので、単一の意味論的値がアプリアリでありかつ偶然的であるというパズリングな事態は生じていない、とエヴァンズは主張するのである。

しかし、エヴァンズのこの提案は、記述名という非常に特殊な表現を含む言明のみに制限されていた。エヴァンズによれば、通常の固有名には、意味論によって、指示固定の記述ではなく、指示対象自体が結び付けられる。それゆえ、固有名を含む問題的な事例には、上の方法は適用されないことになる。

2.4 デイヴィス、ハンバーストン —— 必然性と FA - 必然性

デイヴィスとハンバーストン(Davies & Humberstone, 1981)は、様相論理における「現実に」を表す現実性オペレータ A の特殊性に着目し、それに基づいて、通常の必然性オペレータ \Box に加えて、「現実世界がどんな世界であったとしても、問題のことは成り立っている」という意味の必然性オペレータ FA を導入した。そのうえで、彼らは、この FA - 必然性を、エヴァンズの深い必然性概念についての形式的な特徴づけを提供するものであるとした。

新たな必然性オペレータ FA の一部をなす、現実性オペレータ A の機能は、現実世界として指定された単一の世界を指示することにある。よって、任意の命題 P について、 AP が世界 w において真であるのは、 P が現実世界 w^* において真であるときかつそのときだけである。他方、オペレータ F (fixedly) は、大まかに言って、「 FP が世界 w において真であるのは、どの世界が現実世界とみなされるときでも、 P が w において真であるときかつそのときだけだ」という仕方で特徴付けられる。ここにおいて、現実性は、ある世界に固定的に結び付けられるのではなく、異なる世界に付与されうる特徴とみなされていることが重要である。そこで、 FAP は、「どの世界が現実であったとしても、現実とみなされたその世界において P は真である」と言っていることになる。この新たな必然性を、 FA - 必然性と呼ぼう。

さて、このとき、偶然的、経験的に真である命題 P について、 AP は、どの世界でも真である限り、通常の意味では必然的である。しかし、 AP は、もし P が真でないような他の世界が現実世界だったとしたら、現実とみなされたその世界では偽であったと言えるので、 $FA -$ 必然的ではない。一般に、「現実」に」という表現を含む言明の場合、必然的であるからといって $FA -$ 必然的であるとは限らないし、必然的でないからといって $FA -$ 必然的でもないとは限らない。

デイヴィスとハンバーストンは、以上の道具立てを、エヴァンズの浅い必然性と深い必然性の区別に対する形式的な解明を与えるものとみなした。すなわち、言明 P が浅く必然的であるということは、 $\Box P$ が真であることであり、他方 P が深く必然的であるということは、 FAP が真であることだと主張したのである。その上で彼らは、記述名「ユリウス」とは、「現実」に」という表現を含む確定記述「現実」にジッパーを發明した人」の省略であるとし、「誰かがジッパーを發明したとするなら、ユリウスがジッパーを發明した」という言明が浅く偶然的だが深く必然的であるというエヴァンズの指摘は、「誰かがジッパーを發明したとするなら、現実」にジッパーを發明した人が發明した」という言明が、必然的ではないが $FA -$ 必然的であるという指摘だったのだ、と主張した。彼らによれば、この分析は、アプリアリな偶然性を「現実」に」という表現によって引き起こされるものとして統一的に説明する利点を持つ。

デイヴィスとハンバーストンによる試みは、「現実とみなされた可能世界」といった、チャルマーズらの二次元意味論で用いられるようになる具体的な道具立てを含んでおり、二次元意味論に対する形式的な基礎を提供するものであった。しかし、それでも彼らの提案は、後の二次元主義に比べて制限つきのものであった。彼らは、アプリアリで偶然的な言明は全て、現実性オペレータを含む、偶然的だが $FA -$ 必然的であるような言明として分析できると主張する一方、アポストテリオリで必然的な言明の全てについて、それに対応する分析が適用できるとは主張しなかった。彼らによれば、自然種名「水」は「現実」に」を含む記述とみなすことができるので、アポストテリオリな必然性「 $水 = H_2O$ 」は、「現実」に」を含む記述とみなすことができる。しかし、固有名を「現実」に」を含む記述とみなすことはできないと彼らは考える。それゆえ、アポストテリオリな必然性の事例として挙げられる「キケロ＝タリー」のような固有名を用いた同一性言明は、必然的でありかつ $FA -$ 必然的でもあることになる。このように、彼らの試みは、アポストテリオリな必然性の問題に対して全面的な解答を与えるものとして提示されたわけではなかった。

3. まとめ

以上のように、初期の二次元意味論は、従来認められてきた意味論的内容（二次内包）に加えて、一次内包に相当する第二の要素を要請するという基本的アイデアを提起し、またそれによって、アプリアリな偶然性（アポストリアリな必然性）のパズルに答えを与えるという方針を示唆した。しかし、他方でこれら初期における試みは、何らかの仕方で制限つきのものであった。スタルネイカーは、一次内包は、文の意味論的内容ではなく、プラグマティックな原理に基づいて主張という行為の内容とみなされるだけだと考えた。他方、 Kaplan、エヴァンズ、デイヴィスとハンバーストン は、一次内包（二次元的内包）を表現の意味論的内容とはみなしたが、しかし、一次内包（二次元的内包）を持つのは、自然言語に含まれる表現のうちのごく一部—— Kaplan の場合には指標詞と指示詞、エヴァンズの場合には記述名、デイヴィスとハンバーストンの場合には現実性オペレータを含む記述（とその省略である記述名や自然種名）—— に制限されていた。このような点において、彼らの試みは直接指示説に取って代わるオルタナティブというよりも、むしろそれを補完する装置という性格を強く持っていたと言ってよいだろう。

註

* この論文は、本誌掲載の「二次元可能世界意味論の展開 (2) ——チャルマーズとジャクソンの認識的二次元主義——」、および「二次元可能世界意味論の展開 (3) ——認識的二次元主義に対する批判的応答——」とセットになっている。これら一連の論文は、二次元意味論の歴史的発展を跡付け、また二次元意味論に関する現在の論争点を確認することを目指すものである。本論の中で、それぞれの論文に言及する際には、論文 (2)、論文 (3) と表記する。

(1) これらの用語は、Chalmers(2004)による。

文献

- Chalmers, D. J. (2004). 'Epistemic Two-Dimensional Semantics', *Philosophical Studies*, 118, 153-226.
 Davies, M. & Humberstone, I. L. (1981). 'Two Notions of Necessity', *Philosophical Studies*, 58, 1-30.
 Evans, G. (1979). 'Reference and Contingency', *The Monist*, 62, 161-89.
 Kaplan, D. (1989). 'Demonstratives', in Almog, J., Perry, J., & Wettstein, H. (eds.) *Themes from Kaplan*, Oxford University Press.
 Kripke, S. (1980). *Naming and Necessity*, Harvard University Press. (1985, 八木沢敬・野家啓一訳, 『名指しと必然性』, 産業図書)
 Stalnaker, R. C. (1978). 'Assertion', *Syntax and Semantics*, 9, 315-32.

[大阪市立大学大学院後期博士課程・哲学]